

## キーツとチャプマン訳『ホーマー』

菊池 亘

前に私は、キーツとチャプマン (George Chapman) 訳『ホーマー』との関係について触れたことがあった<sup>(1)</sup>。その時には、まだ明確になし得ていなかったこと、また資料がどうしても手に入らず、そのために具体的に例証することができなかったこと、およびその他のことなどがあった。以降これらのことが私の心に掛かって離れなかった。これらのことについて、最近やや明確化もし、また具体化もしてきたのでここに補足を試みしてみる。論の成り行きから、どうしても前の論考と重複したり、また繰り返しが出て来たりするであろうが、これは止むを得ないことなので、あらかじめ必要条件としておく。

キーツがクラーク (C. C. Clarke) の仲介によってチャプマン訳の『ホーマー』(*Odyssey; Iliad*) を読んで驚喜したこと、そしてその結果として傑作のソネットを生み出したことについて、私はチャプマン訳『ホーマー』の愛好者であったラム (Charles Lamb) のことについて触れている。そしてラムにとって「チャプマンは神の如き」人物であったというようなことを述べている。これはこれで間違いないことであり、訂正を必要としない。そしてここにおいては、ラムとキーツはおそらく「関係がないであろう」と付け加えている。キーツとチャプマンを結び付けたのはクラークを経由することによるものであるとみるのが「最も穏やかであろう」としてい

る。これもそのままでもいい。それに引きつづき、私は「どのようにしてクラークがチャプマン訳を見出したか」、ラムとクラークが「友人関係ということになるとこの辺からこの問題が解決されてくるであろうと思われるが、今のところこの関係については私は確証を得ていないので結論を引き出すことはできない。あるいはクラーク自身チャプマン訳を見出したのであろうか。これが結論にならないでもない」というように、態度を明確にすることはできなかつた。<sup>(2)</sup>

ラムとクラークとの友人関係の有無を突き止めれば、この間のキーツにおける事情は明瞭になってくるというのが、その時の私の疑問的な狙いであった。

結論を先にいってしまえば、この狙いは、ただ臆測からのみ出たことであったが、その方向は外れていなかった。ラムとクラークとの二人の関係というよりも、ラム家とクラーク家は近い関係にあり、互いに長期にわたる行き来があったのである。<sup>(3)</sup>ラムは周知の如くエリザベス朝と 17 世紀文学の心酔者であった。その心酔ぶりをハント (Leigh Hunt) はわれわれに残しているが、チャプマンにだけ限ったところを抜く。「…私はかつてチャプマンの『ホーマー』(二つ折本)<sup>(4)</sup>にラムが接吻するのを見たことがある。」まさに愛書家というよりも書物気遣いである。

ラムがチャプマンの『ホーマー』を読んで、

1802年10月23日コールリッジ(S. T. Coleridge)に次のような文面を宛てている。「…<sup>(5)</sup>ちょうど今チャプマンの『ホーマー』を読んだところです。君は読んだことがありますか？——どんな翻訳のなかでも、調子の早い原文のように、ずうっと君を引き付ける持続力を最も多く持っています、そしてさらに完成された部分の異常な卓越さの点では、フェアファックス<sup>(6)</sup>あるいはどんな人をも越えています。韻律は14綴りであらゆる甘美と壮麗を可能にしています。クーパー(William Cowper)の面白くもないブランク・ヴァースは、何か重いミルトン調で一歩ごとに引っ掛かります。チャプマンは、あなたと一緒に彼独自の自由なペースでギャロップして行きます。…」そしてその見本として『イリヤド』のある箇所(II, 70-7; XI, 228-39)を挙げ、「…私は彼に大きな興味を持っています」と文面を結ぶ。このようなラムのチャプマンへの傾倒は簡単には冷却していない。それはこのころから<sup>(7)</sup>少なくとも間違いなく20年は継続する。その間彼はチャプマンを土台として1808年に『ユリシーズの冒険』(*The Adventures of Ulysses*)<sup>(8)</sup>を書く。これが20世紀になって有名なジョイス(James Joyce)の『ユリシーズ』になろうとはラムは夢想もしていなかったであろう。そして私はこの『ユリシーズの冒険』がギリシア語の原典から為されたのではないことについて、ある興味を持つ。このことについては後程触れるであろう。

このようなラムとキーツは一、二度実際に会っている。その最初の出会いは「永遠の晩さん会」(immortal dinner)といわれる催しにおいてであった。この催しは画家ヘイドン(B. R. Haydon)宅において、1817年12月28日午後3時から夜にかけて持たれた。この会でホーマーも話題にのぼったようであるが、その内容はどのようなものであったのかは分かっていない。そしてキーツとラムは親

しく口をきいたということも考えられない。初対面である上、年齢差が20年もあったのでは、これは無理である。このことはともかくとして、キーツの「ソネット」が書かれたのは1816年10月12日のことであるから、ラムとの出会いとこの「ソネット」は無関係ということになってくる。

こうなってくると、ラムからさんざんチャプマン訳『ホーマー』のすばらしさを聞かされて、自らもそれを読み、ラムに感化されていたクラークを通して、そのすばらしさがキーツに伝えられたということになる。従って『ホーマー』におけるつながりは、ラム——クラーク——キーツということになる。『ホーマー』への驚きの震源地はラムにあったのである。クラークはキーツよりも8歳年長であったのであるから、友人的先輩として、その影響力も直接的であり、そして新鮮なものであったであろう。このようにして、チャプマン訳『ホーマー』はキーツの「ソネット」の形成に対して一半的な寄与をなすことになったのである。

ここに注意しておかなければならないことはポーブ(Alexander Pope)訳『ホーマー』のことである(*Iliad*(1720); *Odyssey*(1726))。

これは既に前稿において触れたことであるが、ポーブは19世紀に入っても依然として、詩人としての影響力を失ってはいなかった。この詩人に対して、いわゆるロマン派の詩人たちはようやく拒否反応を示し始めるが——キーツもその例に洩れない——バイロンのような崇拜者もいることは有名な事実である。このことはさておき、バイロン以外のロマン派の詩人たちをよく読んでみると、この拒否反応というのは実はポーブの長く伸びた影が自分の上にも覆いかぶさってくるのを、なんとかして払い除けようとする努力であったと考えられる。いい換えれば、どのようにすればこの火の粉を浴びずにすむかという意識で

あったということも成り立つ。これだけの意識があったにもかかわらず、それらの詩人の上にポーブの影を認めることはそうむずかしいことではない。委細は避けるが、キーツの場合にも、ある特殊な形を取って、その影は揺曳する。さらにいい換えれば、ポーブという存在を無視することによっては自分たちの詩が成立し得ないということの意識だったともいえるのである。詩のことはこの辺にして。

このような影響力を持つ詩人の手によって翻訳された『ホーマー』が19世紀の初めのころに読まれなかったということは考えられない。だいたい『ホーマー』といえは、それはポーブ訳に決まっていたであろう。

それならばエリザベス朝および17世紀の文学の心酔者ラムにあってはポーブはどのような印象を持つ存在であったであろうか。ラムの目は17世紀から18世紀へ、18世紀からさらに同時代の19世紀（といっても前半になるわけであるが）へと広がっている。この批評眼は並み大抵のものではない。このことについても委曲を尽すわけにはいかないが、このような犀利な目に入ってくるポーブはどのようなものであったか。ラムは「髪毛盗み」(*The Rape of the Lock*)と『ホーマー』が特に気に入っていたようである。「私はポーブ(訳)を繰り返し繰り返し、いつまでも読むことができる」という言葉が今に残されている。プロクター(B. W. Procter)がポーブの『人間論』(*Essay on Man*)の口絵として仕上げられたポーブの肖像画をラムに送ったことがある。これに対してラムは1823年4月13日に彼に返辞を出している。その返書の内容はなかなか面白いのであるが、ここでは、ほんの少し関係のあるところだけを抜く。「…私はポーブを掛けました、そしてそれは宝ものです、私の都会の部屋にあっては、<sup>(9)</sup>ご賛同を得たいものです。…」<sup>(10)</sup>このような工合であるから、ポーブへの態度は崇拜に

近かったものとみていいであろう。ポーブの詩に対しては、いささかの制限が必要となってくるであろうが、『ホーマー』に対しては以上の如くであり、これはほとんど無条件なものであったとしていいであろう。

クラークもおそらく、詩のことについてはどのような意見を持っていたか分からないが、『ホーマー』についてはラムとだいたいにおいて同じような態度であったであろうという推測が出てきそうである。しかし、このクラークはどの程度『ホーマー』を読んでいたのか、その辺のことは、はっきりしないが、やはり時の好尚に従ってポーブ訳をホーマーとして受け取っていたことだけは確かであろう。そしてクラークが、いつごろラムからチャプマン訳の存在を教えられたのであるか、これも今のところ私には不明である。あるいはクラーク自らの手によって、チャプマンを発掘したということも考えられるが、それはまず可能性が薄い。やはりラムからの刺激を入れて考えておくのが自然であろう。しかしこの辺の追跡は課題として後に残しておくことにする。

さらにもう一つここに考えてみなければならないことがある。それはクーパー訳の『ホーマー』のことである。これは1791年に出版されている。従ってこの翻訳の存在についてはラム、クラーク、キーツいずれも承知していたはずである。この翻訳についての評価は‘not successful’ということになっている(*The Oxford Companion to English Literature*)。しかしこの評価を鵜呑みにしていいかどうか私は少しく異見を持つが、今はその場ではない。この翻訳が完成する4年前すなわち1787年クーパーの精神は再度の分裂を見る。翻訳については、この辺の事情も考慮に入れてみる必要もあるであろう。とするとクーパーの精神は異常の内容を特殊なものとする。

既に見た通り、このクーバー訳もラムは読んでいるが、1796年6月13日(月曜、夜)、やはりコールリッジに宛てた手紙がある。そのなかに次のような箇所が見える。「…オディシーは特に確かにホーマー的です。イリアドの初めのところのフィーバス(Phoebus)の出てくる場所などは最高に壮大なものです…。この翻訳のあなたのご意見をお聞きかせ下さい。それは私には高度の喜びを与えてくれました。…」

これでラムは少なくとも三種類の「ホーマー」を読んだことになる。殊に今引用した文面の日時から計算すると、クーバー訳を読んだのはラムの21歳の時に当たる。旺盛な読書欲と好奇心を示す。読書の量と範囲は、おそらく遠く周囲の及ばなかったものであろうことは、この一事からしても推測される。従って1802年10月23日コールリッジに宛てた手紙に見られるチャプマン訳への驚きは単純なものではなかったであろう。この時彼は27歳であり、いよいよ読書欲も深みを増し、好奇の範囲も広がったであろう。そしてこの時の手紙にも見えていたようにクーバー訳は既に「面白くない」ものとなっている。6年間における成長がここにある。ここに、もう一つポーブ訳を手にした日時が見付かると、もっと事情が、はっきりしてきて面白くなってくるのであるが、おそらくこれは、ひょっとするとクーバー訳より早かったかもしれない。というのはポーブ訳は当時の標準版みたいなものであったことは先に触れた通りであるからである。また時間的にいってもポーブ訳はその出版が、はるかに早いことは改めることもないであろうからである。ただポーブ訳に対する愛好が冷却してこなかったことも先に触れた如くである。チャプマン訳とポーブ訳、この二つは並行的にラムの頭のなかにあったかもしれない。そして、それぞれのメリットを認めていたのではなからうか、

というのが私の想像である。

このような工合に、ラムの頭のなかには少なくとも三つの「ホーマー」が存在していたことになるわけである。従って彼がチャプマン訳に驚いた時、その驚きの内容は、いろいろな要素によって構成されていたことであろう。すなわち今までの豊富な読書量によって鍛えられた鑑識力・分析力といったものが、三つの「ホーマー」の比較と複雑に、そして直観的に交差し合っていたであろう。この点だけでいうならば、あとにつづくクラーク、キーツの驚きと、その内容において異なるものがあるであろう。前者の驚きは素人的であり、そして後者の二人の方は素人的なものであったであろう。素人的な、と私はいうがこれは別に二人を軽く見ているわけではない。この二人ともクーバー訳まで手を伸ばしていたかどうか、おそらくそれはなかったであろう。少なくともキーツにおいては確かな事実といって差しさわりはないであろう。そして二人とも当然ポーブ訳は知っていたであろうが、クラークはともかくとして、キーツの場合耽読したということは考えられない。読んだにしても部分読みではなかったのではなからうか。今のところ私はこのように考えている。<sup>(11)</sup>

ここでまた素人的驚きということに戻る。確かにキーツの場合、その驚きは素人的であったはずであるが、ラムのような複雑さがないだけに、それは純粋なものであったであろうということはいえるであろう。素人的とはいえ詩人の驚きである(ラムも詩人ではあるが)。そしてそこには若々しい感受性があった。この感受性には、刺激は少しで十分であった。しかも必要にして、かつ十分なものがあった。詩人の天才の内容を推し測るような不遜を、あえてしようとするわけではないが、掻い撫でにいわせてもらえばキーツの驚きはこのようなものであったであろう。そして純

粋とはいえ、この驚きのなかにはポーブ訳との比較が横切ったであろう。そこから「ソネット」の原名に含まれる 'look into' への検討が生じてくるのであるが、これは前稿において触れた。

クラークによって、チャブマン訳を知らされたとはいえ、それはわずか一日だけにおける出来事であった。このわずか一日だけで、いくらなんでも、『ホーマー』を二冊とも読み通すというわけにはいかない。クラークの言葉を借りれば「極めて有名なある」(some of the 'famouses') 箇所だけが抜き読みされたようである。幸いにしてその箇所は今日われわれに分かっている。(因にラムの感激した箇所の方は *Iliad*, II, 70-7; XI, 228-39 のところであって、クラークのものとは一致しない。この辺も比べてみると大変面白いのであるが、紙面が許さない。それからチャブマン訳のことについて、少しいわなければならぬこともあるのであるが、これも今は措く。) いきなり具体例に入る。比較の参考にもなるであろうからチャブマン訳とポーブ訳の両方を挙げておく。

上の方がチャブマン訳<sup>(14)</sup>、下の方がポーブ訳<sup>(15)</sup>である。(A), (B), (C), (D) は *Iliad* からの例であり、(E), (F) は *Odyssey* からである(訳文省略)。

## (A)

But when out of his ample breast he gave  
his great voice passe  
And words that flew about our eares like  
drifts of winter's snow,  
None thenceforth might contend with him,  
though nought admird for show. (III,  
242-4)

But, when he speaks, what elocution flows!  
Soft as the fleeces of descending snows,  
The copious accents fall, with easy art;  
Melting they fall, and sink into the heart!

Wondering we hear, and fix'd in deep sur-  
prise,

Our ears refute the censure of our eyes.

## (B)

Like rich Autumnus' golden lampe, whose  
brihtnesse men admire  
Past all the other host of starres when with  
his chearefull face  
Fresh washt in loftie Ocean waves he doth  
the skies enchase. (V, 6-8)

Like the red star that fires the autumnal  
skies,

When fresh he rears his radiant orb to  
sight,

And, bathed in ocean, shoots a keener light.

## (C)

……the great Sea-Rector spide,  
Who sate aloft on th'utmost top of shad-  
ie Samothrace (XIII, 10-11)

Meantime the monarch of the watery main  
Observed the Thunderer, nor observed in  
vain.

In Samothracia, on a mountain's brow,  
Whose waving woods o'erhung the deeps  
below,

He sat;

## (D)

His bright and glorious pallace built of  
never-rusting gold:

And there arriv'd, he put in Coach his  
brazen-footed steeds.

All golden-man'd and pac't with wings;  
and all in golden weeds

He clothed himselfe. (XIII, 22-5)

Far in the bay his shining palace  
stands,

Eternal frame! not raised by mortal hands:  
This having reach'd, his brass-hoof'd  
steeds he reins,

Fleet as the winds, and deck'd with gold-  
en manes.

## (E)

……. he beheld the Pleiades,  
 The Beare, surnam'd the Waine, that round  
 doth move  
 About Orion, and keepes still above  
 The billowie Ocean, … (V, 342-5)  
 There view'd the Pleiads, and the North-  
 ern Team,  
 And great Orion's more refulgent beam,  
 To which, around the axle of the sky,  
 The Bear, revolving, points his golden  
 eye:  
 Who shines exalted on the ethereal plain,  
 Nor bathes his blazing forehead in the  
 main.

(F)

Then forth he came, his both knees  
 faltring, both  
 His strong hands hanging downe, and all  
 with froth  
 His cheeks and nostrils flowing, voice  
 and breath  
 Spent to all use; and downe he sunke to  
 Death.  
 The sea had soakt his heart through: (V,  
 608-12)  
 That moment, fainting as he touch'd the  
 shore,  
 He dropp'd his sinewy arms: his knees  
 no more  
 Perform'd their office, or his weight up-  
 held:  
 His swoln heart heaved; his bloated body  
 swell'd:  
 From mouth and nose the briny torrent  
 ran;  
 And lost in lassitude lay all the man,  
 Deprived of voice, of motion, and of  
 breath;  
 The soul scarce waking in the arms of  
 death.

チャプマン訳とポーブ訳については既にい  
 ろいろ今までにとりあげられているし、その

ことについては前に私も触れたことがあるの  
 で、その評価のことについては何もいわない  
 でおく。ここにおいては結果的なことだけ  
 ついて述べる。どちらがいいか、というこ  
 になると、それぞれの持ち味があってなん  
 もいえない。ラムにしてもポーブ訳を「繰  
 返し読むことができる」といっている通り  
 で、チャプマン訳に比べると、より説明的  
 であるような気がするが、流れは滑らかで  
 ある。それでは、どちらの方が原文に正  
 確に即しているか。これは専門家に質し  
 てみなければならぬであろうが、おそ  
 らくポーブの方であろう。何しろチャ  
 プマンの方はギリシア語の知識は不正  
 確なところがあった。ここで困ったこ  
 ことになるのだが、知識の正確が直  
 ちに名訳を生むかということである。ど  
 うもこうなるとチャプマン訳の取り扱  
 い方については慎重を要することにな  
 る。チャプマン訳のメリットから入っ  
 て行かないとこの論考には工合が悪い。

チャプマン訳はどのように読むべきで  
 あるか。この訳には、豊かなオルガンの  
 音楽が流れている。そして行間には力  
 がひそむ。従って、ゆっくり読むと  
*Iliad* はむずかしいように思われる  
 であろうが、スピードを出して読めば  
 完全に味わうのになんの支障も来  
 ない<sup>(16)</sup>。 *Odyssey* についても、漠  
 としたところ、逸脱したところがある  
 が、それにもかかわらず話は力強く  
 立派に進展していくのである<sup>(17)</sup>。  
 その原文から逸脱した一例は (F) の  
 V, 612 の The sea had soakt his heart  
 through である。これは見る通りポー  
 ブ訳にはない。こうなるといささか創  
 作も混入してくることになる。とて  
 も現代では考えられないであろうし、  
 許されもしないであろう。それから誤  
 訳であるが、ボードレールのポーの小  
 説についての誤訳は余りにも有名で  
 ある。これと似たようなことがゲーテ  
 におけるホーマーにもある<sup>(18)</sup>そう  
 である。

こうなってくると翻訳とは一体どういうものかという、つくづく考えさせられる問題が出てくるが、今は翻訳論を行なっているわけではないので、このことについてはこれ以上立ち入らないことにする。以上に見たように、やかましいことをいえば、いくらでもボロの出でくるチャプマン訳について、一応の締め括りしておかなければならない。このような傷を持つ、というよりも傷だらけと誇張してもいいかもしれないチャプマン訳『ホーマー』のなかに、幾世紀かを乗り越えてギリシア人と呼応するエリザベス朝のイギリス人がいるということになってくる。ブッシュ(Douglas Bush)はいう——もしホーマーが天国から帰って来て全部の英訳を読んだらチャプマンこそは本当の息子と思うであろう…彼は‘The sea had soaked his heart through’<sup>(19)</sup>を喜んだことであろう…。このようなところにチャプマン訳の最大のメリットがあった。

私は先にラムの『ユリシーズの冒険』がギリシア語の原典から為されたのではないことについてある興味を持つ、といった。というのはラムと同じくチャプマンも、また彼に刺激されたキーツも、さらに深く突き進んでギリシアの世界に入って行こうとはしなかった。ゲーテのようにギリシア人のなかに *Ur-mensch* を見出して、絶えずホーマーに帰って、そこからよみがえったというような態度は出てこないのである。<sup>(20)</sup>ここに三人に見られる態度に共通した限界がある。

キーツの場合においても、彼とギリシアの関係を考えてみる時、このことは絶えず念頭にあるべきであろう。彼においては、ギリシアといっても、それは変形されたイギリスであったであろうし、ホーマーといってもエリザベス朝の詩人のひとりであったという限界があったといわなければならない。ギリシアもホーマーも遂にイギリスを出ることはなかったのである。

## 注

1. 一橋大学「人文科学研究」(16)。
2. 同上 82-3 頁。
3. Will D. Howe: *Charles Lamb and His Friends* (Greenwood Pr., 1972), p. 48.
4. *Ib.*, p. 113.
5. *Ib.*, pp. 312-13. Cf. *The Letters of Charles Lamb* ('Everyman' ed., 1950), I, 228-9.
6. Edward Fairfax (c. 1580-1635).
7. Cf. *The Letters of Charles Lamb*, II, 29.
8. Will D. Howe: *op. cit.*, p. 219. Cf. *The Letters*, I, 301.
9. *The Letters of Charles Lamb*, II, 81-2.
10. Will D. Howe: *op. cit.*, pp. 313, 331.
11. 「人文科学研究」(16), 84 頁参照。
12. Robert Gittings: *John Keats* (Heinemann, 1968), pp. 81-3; John Barnard: *John Keats: The Complete Poems* ('Penguin English Poets', 1973), p. 546.
13. Cf (5).
14. Allardyce Nicoll(ed.): *Chapman's Homer* (Routledge & Kegan Paul, 1957), I (*The Iliad*); II (*The Odyssey and The Lesser Homeric*).
15. Alexander Pope: *The Iliad of Homer* ('The World's Classics', 1951).  
Alexander Pope: *The Odyssey of Homer* ('The World's Classics', 1949).
16. Allardyce Nicoll(ed.): *Chapman's Homer*, I, pp. xi-xiii.
17. *Ib.*, II, p. xi.
18. Humphry Trevelyan (Übers Wilhelm Löw): *Goethe und die Griechen* (Schröder, 1949), S. 214-16
19. Allardyce Nicoll (ed.). *op. cit.*, I, p. xiv.
20. Vgl. Humphry Trevelyan: *op. cit.*  
(追記) なおチャプマン訳『ホーマー』については John Dryden: *Dedication of the Aeneis* (George R. Noyes (ed.): *The Poetical Works of Dryden* (Houghton Mifflin, 1950), p. 517) を参照。